

北上拠点2団体

大東でたたら製鉄実験

北上市を拠点に鬼の地名と鉄作りを探索する「鬼柳町歴史を語る会」(Zumonaiスモナ、佐藤克英会長)と北東北の歴史を研究する「北天塾」(菊池清春塾頭)は7日、製鉄文化の継承活動などに取り組む「ホツパの会」(勝部昌平会長)の協力を得て、一関市大東町大原地内の砂鉄川たたら製鉄学習館で赤鉄鉱を原料にし、たたら製鉄実験を行った。取り出した鉄を専門機関で調査することで、北上市内で出土した蔵手刀くらでとうの原料調査に活用していく。

たたら製鉄は原料に砂鉄と、同市と西和賀町境付近などを使うことが多く、赤鉄鉱を用いた事例は少ないが、スモナによると北上市では6〜7世紀の蔵手刀が数多く出土していること

を企画した。同日は二つの炉で計35キ

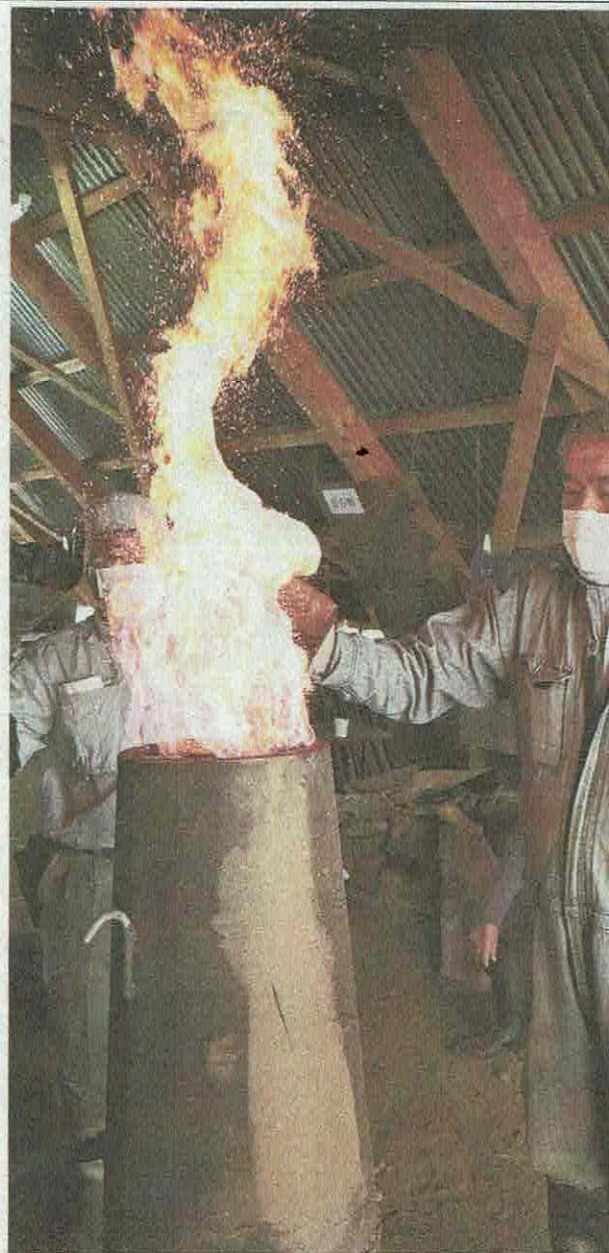
の赤鉄鉱を使用。片方は1キほどの大きさで、もう片方は細かく砕いた物を固めて使った。関係者は約1300度の炉に赤鉄鉱と炭を交互に投入して熱し、二つ

の炉合わせて約8キの鉄を精製した。

今後、いわてたたら研究会(盛岡市)が成分分析などを行い、北上市で発見された蔵手刀のルーツ調査に生かす方針。

スモナの佐藤会長は「北上で発見した蔵手刀の材料が地元の赤鉄鉱だった場合、画期的な発見になるので、今後の調査結果を待ちたい」と語った上で「かつて鉄作り集団は鬼と呼ばれていた歴史もある。鬼柳の地名の由来なども調べていきたい」と話していた。

蔵手刀ルーツを調査



炉に赤鉄鉱を投入する参加者